

# 翔ける思いは形となって

県立鹿児島中央高等学校 一年

江口佳穂

飴というものは、なんて儂いものなのだろう。口に入れた瞬間はとても甘くて夢のような時間なのに、それは少しずつ溶けて小さくなり、最後はなくなってしまふ。

飴というものは、なんて儂いものなのだろう。

気づいた時には辺りは真っ白だった。今自分はどこにいるのか皆目見当もつかない。今はつきりとわかるのは自分の名前ぐらいだ。だが、名前というかけがえのないものでさえ今の私には何の価値も見いだせなかった。そんな中、唯一今の自分を知る手掛かりがあった。それは、体にできていた無数の傷だった。かなり深い傷もあるが、奇妙なことに痛みは全く感じなかった。なぜ自分はこんなに傷だらけなのか、何の記憶もない今の状況ではその唯一の手掛かりすらも生かすことができず、ただ呆然と立ち尽くすばかりだった。

辺りには何もない、人気のない所。周りを遮るものがないため、何もない空間が光で満ちている空間のように感じる。

どのくらいここに立っていたのか自分でもわからない。これからずっとこの地獄のような無の空間に続けるのかと思うとどんどん気が遠くなっていく。そんなことを考えていると、

「おい、意識はあるかい？」

というどうにも間の抜けた声が聞こえてきた。驚いて辺りを見渡すと、遠くに黒い小さな点のようなものが見えた。よく見ると、それが人であることが分かった。なんであんなに離れたところから、私のはっきり聞きとれる声が聞こえてくるのか不思議だったが、

「そう驚くことでもない。僕は君の頭の中に話しかけているのだよ」

という声が聞こえて、声の主が私の心を読めること、意味は分からないが、頭に話しかけられていて、私の耳がおかしくなったわけではないということが理解できた。

「頭の中に話しかけているってどういうことですか？」

「君の頭の神経に僕の声を伝えているってことだよ。難しい話だから簡単に言うと、僕だけに与えられた特別な力があったところかな。さてと、これ以上混乱させるといけないから、君の近くへ行くとするかな」

そう言うと突然、耳元で何かを囁かれたかのような感覚があった。ふと横を見ると、一人の男が立っていた。二十代くらいの若い男で、髪が短くなかったら性別が判断できないほどの可愛らしい見た目に似合った高い声が特徴的だった。

「……あなたは一体何者なんですか？」

すると男は少年のような眼差しで私を見つめた。

「まあ、そんなことどうだっていいじゃないか。君がずっとここに佇んでいたから、まだ現実を受け入れられていないんじゃないかなと思ってここにきたんだよ」

「現実……ですか。今少なくとも分かっているのは、自分の名前だけです。自分がいったい何者なのかも全く分かりません」

「そう、君はまだ自分に起きたことを理解できてないんだ。だから君が失っている記憶を取り戻す手助けをするのがぼくの役目ってことさ！」

私は、彼の明るさについていけるか不安になった。自分が何者なのかということも分からなくて途方に暮れている状況なのに、こんなテンションが高い人と一緒にいないといけないのかと思うと少しだけ憂鬱な気分になる。そんなことを考えていた時、私ははっとした。この人は私の心が読めるのだ。まずいと思った時にはもう遅かった。彼は不機嫌そうな顔をする、

「君、失礼だぞ。じゃあ君は、自分と同じような気持ちの沈んだ奴にきてほしかったっていうのかい？ そんな奴が来てって君に何の得もないぞ！ 僕が来たことを少しは喜んでほしいものだね」

とそっぽを向いて言った。

「ご、ごめんなさい。そういうつもりじゃないんです。ただ、

こんな状態で誰かと一緒に過ごすことに気が進まなくて……だから別にあなたと一緒に過ごすことが嫌なんじゃないんです」

かなり苦し紛れな言い訳だと思ったが、  
「そういうことなら……まあ、仕方ないな。よし、じゃあ私を取り直して、君の身に起きたことを確認していこう。じゃあこれを渡すから君の好きな時に自分に起きたことを確かめて来るといいよ」

そう言うと、突然小さな小袋を渡してきた。

「これは何ですか？」

「この中には君が生きてきた軌跡が入っているんだ。まあつまり、君の人生に影響を与えた出来事が飴となっているってことだ。これを舐めると一時的にその時の記憶を呼び起こすことができる。つまりこれを使うことで、君は自分に起きた現実を理解できるってことさ」

袋を開けてみると、夕日のようなオレンジ色の飴が四つ入っていた。飴の中は透き通っていて、ずっと見つめていると、意識が持っていかれそうな気分になった。

「待ってください。そんなこと急に言われてもこんな得体の知れないもの舐められないですよ。そんな簡単に説明されてもこっちはまだ頭が追いつかないですし」

「そんなこと言われても、僕にはこんな説明しかできないんだよね」

少し困ったような顔をして軽く頭をかいた。そして、何を

思ったのか、急に、

「よし、じゃあ、一回体験した方が早いかな」

と言つて、私から袋を取り上げると、その中から飴を一つ取り出し、無理やり私の口に押し入れた。私は驚きすぎて飴を呑み込んでしまった。喉元でひっかかってしまった飴を吐き出そうとせき込んでいると、飴の微かな甘酸っぱさに意識を奪われていき、その場に倒れこんだ。すると、さっきと同様に頭の中に声が聞こえた。それは聞き覚えのある耳をくすぐるような声だった。

『あたし、まおつていうの。よろしくね!』

私はゆっくりまぶたを閉じた。

あたしはブランコをこいでいた。まわりにはだれもいないから、こうえんが大きくなったみたいだ。かぜがつめたくてきもちがいい。こうしていると、おとうさんとおかあさんがむかえにきてくれる気がする。

しばらくこいでいたら、一人の女の子がこっちにむかっってはしつてきた。あたしはその子を見つけたときには、もうブランコからおりてはしりだしていた。いま、いちばんあいたくない子だった。だってあの子は、へんなことをいうんだもん。

「まっつてよ、なんでにげるの？」

そういつてその子はわたしにおいつくと、あたしのうでをつよくつかんだ。ひっばつてはなそうとしても、その子はぜんぜんはなしてくれなかった。

「はなして! あなたとははなしたくない」

だれにもいったことないようなことばだったけど、これがいまのあたしのほんねだった。

「なんでそんなこというの？」

その子はおこったかおであたしを見てきた。

「だつてさつき、おとうさんはお空にいったつていったじゃん」

「…:だつて、おかあさんがいつてたんだもん。あたしはそのままいつただけだよ」

そう、この子はおとうさんがしんじやつたなんていうんだ。だからおかあさんが、こうじょうにいくことになつてこの子のいえでくらさなきやいけないつていわれた。そんなの、ぜつたいうそだ。

「あたしはここで、おとうさんとおかあさんがくるのをまつてるの。もうあつちいつてよ」

「…:そうだよ。うちで、おとうさんとおかあさんがまつてるよ」

「…:でも、あたしのおとうさんとおかあさんじゃないもん」  
「ちがうよ。あたしのおとうさんとおかあさんがあなたのもう一つのかぞくになるんだよ。だからあたしとあなたは、し

まいになるってこと。もうひとりぼっちじゃないんだよ」

「すぐやさしいえがおだった。さっきまではいやな子っておもってたけど、そうじゃなかった。あたしのことをおもっていつてくれるんだ。あたし、この子のかぞくになれるのかな。もう、ひとりでもたなくてすむのかな。すると、その子はあたしのをゆっくりはなすと、つめたくなっていたあたしの手をやさしくにぎり、

「あたし、まおっていろいろの。よろしくね！」

「……あたしは、ひなっていろいろの」  
と。小さいこえだったけど、まおにははつきりときこえているみたいだった。

気が付くと、真っ白な空間に戻っていた。まだ真央と出会ったあの瞬間が脳裏に焼き付いていた。夢を見ていたような感覚が抜けないままぼんやりしていると、私はふとあることに気が付いた。それは、腕にあった傷がいつの間にか消えていたということだった。傷跡も全くなく、心なしか血色もよくなっているように感じた。

「どうだった？ 少しは記憶が戻ってきたかな」

温かみのある声が聞こえてふと横を見ると、例の男が立っていた。全く気配を感じなかったから、心臓が飛び出るかと

思う程驚いた。

「急に横に立たないでもらえますか。心臓に悪いですよ」

「ごめんごめん、今後気を付けます。それにしても、随分とあの世界を楽しんでいたようじゃないか。やっぱりあの飴を渡したのは正解だったね」

「私、あんな大事な存在だった真央のことを忘れていたなんて。真央と出会っていなかったら、私はずっと一人で両親の影を追っていたんだなって思いました。血のつながりはないけど、真央の家族は私にとっても一つ家族なんです。だから真央は、私の心を救ってくれた恩人で、最高の親友なんです」

すると男ははにかむように笑うと、さっきまでのひょうきんな態度とは反対に、少し大人びた表情をしながらどこか遠くを見つめるようにして、

「あと飴は三つある。君の好きな時に舐めるといいよ」

と優しく言った。私は軽く息をつくと、ポケットに入れていた袋をそと取り出した。さっき見た時には気づかなかったが、心なしか袋の飴は綺麗なオレンジ色の中に少しだけ別の色が混ざっているように感じた。そして私の手は、少し青みがかかった色の混ざる飴をおもむろに袋の中から取り出していた。そしてそとその飴を口の中に入れた。すると、さっき食べたのとは違って、甘さの中に微量のほろ苦さがあった。『命を救うってことは、その人の人生に「続き」を与えるってことなの』

そんな声が聞こえてきたような気がした。そして、例のごとく極度の眠気に襲われ、ゆっくりと目を閉じた。

もうどれくらい走っているだろうか。荒々しく吐く息で私の視界に白く靄がかかる。空を覆っている濁った色をした厚い雲が、私をより急がせた。私の足音だけが辺りに響き渡る。全く人気がないのに、どこか窮屈さを感じる。そんなことを考えていると、道端にあった石が私の走る勢いを止めた。

「あっ！」

次の瞬間、強い衝撃が全身に走った。体のほてりが冷え切ったコンクリートにどんどん吸い取られていく。派手に転んでしまったから、体を起こすのも一苦労だった。こんな恥ずかしい姿を誰にも見られなくて本当によかった。ゆっくり体を起こし、痛み出していた膝を見てみると、思いつきりすりむいていて、血がかなり出ていた。冷たい空気に触れると、思わず顔をしかめてしまう。とつさに、ポケットからハンカチを取り出して傷口にしつかりと巻き、出血を押さえた。再び走り出すのはかなりきつかったが、そんなことを考えるより体の方が先に動いていた。今の私には、この膝の痛みなんて感じている暇もなかったのだ。

### 『常治総合病院』

その看板を見つけた瞬間、ようやく息ができたような気がする。

した。広い駐車場を横目に、病院の入口めがけて走り抜けた。入口まで来ると、走るのを止め、早歩きで病院内に入った。エレベーターを待っている時間も惜しかったから、階段を上ることにした。三階まで一気に駆け上がると、まっすぐ伸びた廊下を進んで、突き当りの病室に向かった。病室の前に着くと、上がっていた息を少し整えて軽くノックし、中に入った。見ると、ベッドに横たわっている真央と主治医の智野先生がいた。なぜか二人とも驚いた顔をしている。

「どうしたの陽菜ちゃん、顔真っ赤じゃない！」

そう先生に言われて顔に手を当てると、かなり熱くなっていた。そういえば、学校を出てからここに来るまで、こけたあの時しかろくに止まっていなかった。おそらくこんな真冬に顔を真っ赤にしているのは私くらいだろう。

「……だって、今日は真央の手術日だったから、急いで来ようと思って」

と言うと、ベッドにいる真央が小さく笑い出した。

「陽菜、手術は午前中に終わって、もう三時間くらい前から起きてたの。そんな急いで来なくても全然よかったんだよ」

「えっ、そうだったの!? もっとかかると思ってた」

「手術が予定より順調に進んでね。もう大丈夫。あと二週間くらいは安静にしとかなないといけないけど、それを乗り切ったら今まで通りの生活に戻れるわ」

先生のその言葉を聞いて、やっとまともに息ができた気がする。

「先生、本当にありがとうございました」

私はこれまでしたこともないくらい深く頭を下げた。すると先生は優しく微笑みながら、

「いいえ、こちらこそ私に真央ちゃんを任せてくれて、ありがとうございました」

と言つて深く頭を下げると、泣き出しそうな顔をしていた私に椅子に座るよう促してくれた。やっと腰を下ろせると思ひ、膝を曲げた次の瞬間、今まで感じたこともないような激痛が走った。真央の無事を確認して、やっとまともな感覚が戻ってきたようだ。スカートで隠れていた膝を見ると、さつき応急処置として巻いていたハンカチから血が染みだしていた。

「陽菜ちゃんそれどうしたの？」

「あの…ここに来る途中で転んじやつて」

「すぐ手当てしないと！ ほらこっち来て」

先生に言われるまま処置室へ歩みを進めた。

「ほんと、陽菜はそそっかしいんだから」

久しぶりに見る真央の本物の笑顔は、眩いばかりに輝いていた。病氣と闘っていたときに見せていた笑顔は作り物のようで、温かさを失っているように見えた。今はそんな面影はみじんもなかった。もしかすると、この笑顔をもう二度と見られなくなっていたかもしれないんだと思うと、この瞬間がとてつもない価値を持つていることに気付いた。病室を出て辺りを見ると、真央の病室の明るさが目についた。

外は思っていた以上に寒かった。自販機で買ったココアの温かさが冷えた体を溶かしていく。

「傷はまだ痛む？」

ふと顔を上げると、目の前に智野先生の顔があった。

「もう全然痛くないです。ありがとうございます」

「それならよかった。隣座ってもいい？」

「ええ、どうぞ」

「お母さんたちの所に行かなくていいの？ こんな寒いところにいなくてもいいんじゃない？」

「大丈夫です。今はなんか、外の寒さを感じていたくて」

「そっか」

そう言うと、先生も自販機で買ったと思われるブラックコーヒーの缶を開けた。

「…先生、少し話したいことがあるんですけど、いいですか」

「私なんかでいいなら聞くよ、何でも話して」

「ありがとうございます。…話したいことってというのは、進路のことなんです。私も高校に進学する年になったので、将来何がしたいか決めたいって思ってたんです。そんな時に真央に脳腫瘍が見つかって、私、真央を失ってしまいかもっていう不安でいっぱいになって、自分の夢なんて考えられませんでした。そしたら、先生に出会って、真央に対する真剣な眼差しと、絶対に助けるって強い思いが伝わってきて、

この人なら真央を助けてくれるって確信しました。お父さんもお母さんも同じ思いでした。そして、その思いは的中した。

先生は、私たちとの約束を果たしてくれました。

そんな先生の姿を見て、私思ったんです。先生みたいな医者になりたいって。患者さんやその家族の希望となれるような、そんな医者に」

「そうだったのね。ねえ、陽菜ちゃん。今からあたしが言うこと、しつかり聞いといてね」

そう言うと、先生は私の目をしつかり見てこう話し始めた。

「陽菜ちゃんが医者になりたいって思ったんだったら、しつかりその思いを尊重すべきだと思う。でも、これだけは覚えていて欲しいの。医者っていう職業には、覚悟と決断が必要になってくるってこと。この二つをどんな状況でも頭に入れていたら、きっと素敵な医者になれるわ。人の人生は、長い小説みたいなものよ。命を救うってことは、その人の人生に『続き』を与えるってことなの」

先生の言葉は私の求めていた答え以上のものをくれた。もう迷いなど消えていた。ただひたすらに努力して、絶対医者になる。残っていたココアをすべて飲み干すと、まだ温かさの残る缶の上に白い綿あめのようなものが優しく触れてきた。ふと空を見上げると、純白の珠がふわふわと舞い降りてきていた。

「きれいですね」

これ以上の言葉は不要だった。ずっと肌と同化していくよ

うで、自分も溶けてなくなってしまうような感覚を覚えた。

「ホワイトクリスマスだね。神様も真央ちゃんの手術が上手くいったことを祝福してくれているみたい」

すっかり忘れていた。今日は十二月二十五日、クリスマスだ。今年のクリスマスは特別な日になったなあ。

「きつと真央ちゃんの命は、サンタさんからのプレゼントなのかもしれないね。陽菜ちゃんの願いを叶えるために、私に力を貸してくれたんだと思うよ」

そう言ってコーヒを一気に飲み切り、ご両親とお話ししてくるねと言ってベンチから腰を上げた。去ろうとする先生の背中に向かって私はとっさに、

「クリスマスプレゼント、ありがとうございました」

と言っていた。先生は軽く笑みをこぼすと、病院内に戻っていった。

その後再び自販機へいき、初めてカフェラテのボタンを押した。おもむろに取り出すと、少しだけ口の中に流し入れた。甘さの中にほろ苦さがあった、この味を一生忘れないんだろうなと思った。そして少しずつエスプレッソの苦みが消えていく感覚に身をゆだねていくのだった。

少しずつこの虚無の空間にも慣れてきた。目覚めた瞬間にこの空間にいと、今まで何もなかったように感じる。そしてより孤独に思うのは、周りに人影すら見当たらなかったか

らだ。今までは彼と関わりたくないと思っていたが、ここまでも誰もいない空間にいると心細くなってくる。そつと体を起こし、ふと足を見ると、傷だらけだった足が生氣を取り戻して、記憶を取り戻すことで傷が消えていくのが気のせいではなかったということが分かった。確か残りの飴は二つ。早く二つとも舐めて記憶をすべて取り戻したら、この空間から抜け出せるかもしれない。そう考えていると、無意識のうちに体が動いていた。袋から取り出していた飴は、薄い赤色が混じっていた。まるで夕焼けのような飴を舐めると、強い甘さが口いっぱい広がった。

『たとえ姿かたちが存在しなくても、あなたの中に父さんは生きているのよ』

その言葉に導かれるように、意識が薄れていった。

「陽菜、もうすぐ美寿紀がくるわよ。準備急いでー」

お母さんの声が遠くから聞こえ、私の料理を作る手が自然と早まった。今日のメニューは肉じゃがとおにぎりと味噌汁だ。ごく普通のメニューでも、これは私にとって大切なメニューだった。味噌汁はもうできてて、肉じゃがはあと少し煮込んで、おにぎりを作って完成だ。

「あー、いい匂い。陽菜の料理ってほんとおいしいもんね」

ふと隣からそんな声が聞こえてきて、見ると幸せそうな笑顔を見せている真央がいた。

「そうやっておいしいって言ってくれる人がいると、こつちも作り甲斐があるってもんだよ」

「そっか。よし、私も手伝おうかな」

そう言って手を洗い始める真央の姿を横目に、私は手のひらに塩を付けて、光り輝く真珠を作っていた。

料理をテーブルに運び、あとはあの人の到着を待つだけだった。四人でテーブルを囲み、食事と一緒にインターホンの音を待ちわびていた。でも、みんなはまだ知らない。私が今日ある決意をもってこの場にいることを。

――ピンポン――

この音が聞こえた瞬間、みんなの顔が急に明るくなって、食卓がみんなの笑顔で眩しかった。

「私いつてくるね」

そう言うと私は玄関に急いだ。玄関までの足取りは少しずつ早くなっていった。玄関に着いたらドアの向こう側に人影が見え、自然と胸が高鳴った。一呼吸おいてドアを開けると、互いに笑顔になった。

「久しぶり、母さん」

「久しぶり、陽菜」

こんなやり取りでさえ私にはとても温かくて大切なものだった。確か最後に会ったのは私が大学に入学した時だったはずだ。あれからもう八年経っている。そんなことを考えながら母さんと一緒にリビングへいくと、三人の顔がさっきよりも輝いた。

食卓を囲む席は本当に楽しくて、笑顔が絶えなかった

「久しぶりに美寿紀とご飯が食べられてほんと嬉しい」

いつも明るいお母さんが見せる笑顔の何倍も眩しいものだった。

「ほんとね、いつも夕飯は一人だからこんな食卓にいられて本当に幸せ」

二人で楽しそうに笑いあっている姿を見ると、この二人は本当の親友なんだと思う。この二人の関係がなかったら、私は真央と出会うこともなくてずっと一人だったのかもしれないと思うと、二人の存在がより大きく感じられた。

「美寿紀さん、仕事続きで疲れているでしょうから、どうぞゆっくりしてってくださいね」

「ありがとうございます。いつも陽菜がお世話になっているのに何のお返しもできなくて本当にすみません」

「何言ってるの。いつも陽菜ちゃんの成長を見せてもらってるんだし、全然気にしないで」

「そうですね。それに真央が大変な時はたくさん援助して頂いて本当に助かったんですから、お互い様です」

そんなやり取りを聞いていて、互いに支えあうことの大切さをしみじみと感じた。こうしてみんなで食べるご飯の味を超えるものはないと強く思った。

「ねえ、美寿紀さん。この料理陽菜が作ったんだよ」

「そうなの？ 腕上げたわね、陽菜」

「ありがとう。これ、よく父さんが作ってくれたメニューだ

から、上手く作ろうって思って何度か練習したんだ」

「父さんの味、ちゃんと出てるわ」

その言葉は本当にうれしかった。父さんのことはほとんど覚えていない。でも、料理がとても上手で、よくいろんな料理を作ってくれたことは微かに覚えがある。特にこのメニューは父さんが良く作ってくれて、その格別なおいしさとこれを食べている私を見ている時の笑顔がずっと頭に焼き付いていた。実際に記憶を頼りに作るのはかなり難しかったが、こうして母さんのお墨付きがもらえて、私が思い出す父さんの姿がより鮮明なものになっていった。

そんな幸せな時間が過ぎていき、徐々に私は腹をくくらなければと思った。私の決断はきつと受け入れてもらえない。でも、みんなには受け入れて欲しい。私は大きく深呼吸して、こう切り出した。

「ねえ、みんな。私、国境なき医師団に入りたいって思ってるの」

私が想像した通り、幸せに満ちていた空間がびたっと静まり返った。辛い瞬間だったけど、私はためらいが生まれる前に話を続けた。

「……智野先生が来年から国境なき医師団に参加することになって、先生の助手として今年の研修医の期間が終わるタイミングで一緒にシリアへいきたいって考えてる。シリアは紛争続きで危険な地域だけど、そんな地域にこそ医者が必要だと思うの。私は国の犠牲になった人たちの力になりたい。だ

から私が国境なき医師団に参加するのを応援してほしいの。  
お願いします」

ベットに横になってどれくらい経つだろう。みんなの顔が頭から離れない。お母さんの固く結んだ口、お父さんの眉間に皺を寄せた眉、真央の今にも泣きそうな目が私の目頭を熱くした。

でも、母さんだけは表情を変えずに私の目をじっと見つめていた。その目もまたいろんな思いがこもっている目だった。あんなこと言わなければよかったかなと、自分の言ったことを思い返していると、控えめにノックする音が聞こえた。ゆっくりと体を起こし、おもむろにドアを開けると、なぜか優しい表情をした母さんが立っていた。

「陽菜、入ってもいい？」

「……うん」

そう言っただけに入ると、一緒にベットに腰かけた。

母さんは怒ってるのかな。

「陽菜、母さんね、あの話聞いてからずっと考えてたの、父さんのこと。父さんならあなたになんて言っただけだろうって。そしたら、あの肉じゃがの味を思い出したの。ああ、父さんは陽菜の中にいるんだって。だからきくと陽菜のこと応援するんだろうなって。いつかね、父さんが戦争ジャーナリストになった理由を聞いたことがあるの。そしたらね、自分が戦争ジャーナリストになったのは、戦いに巻き込まれて

苦しんでいる人たちのことをたくさんの人に知ってもらって、少しでもそんな人たちの力になりたいって思う人が増えるよう手助けしたいからだって。父さんは最期まで互いに助け合う力を信じ続けていたの。そんな父さんの心は、あなたに受け継がれている。母さんは、あなたの話を聞いて本当に嬉しかった。だから私はあなたを止めたりしない。自分の信念を思う存分貫きなさい」

母さんの言葉を聞いて、思わず涙がこぼれた。父さんの思いは今の私の思いと変わらないのだ。すると、母さんは私の頬を優しく包み込むと、優しく語りかけた。

「時間はかかってもきくとみんな分かってくれる。あなたは智野先生といきなさい。それと、これだけは忘れないで。たとえ姿かたちが存在しなくても、あなたの中に父さんは生きているのよ」

「うん」

私は母さんに寄り掛かった。そして、母さんの温かさに包まれながらゆっくり目を閉じると、涙の温かさに意識が溶けていった。

つうつと涙が流れ落ちた。さっきまでだったら涙が傷口にしみて顔をしかめていたところだが、今は全く痛みを感じない。まだ体に温もりを感じていた。夢のようなこの時もあと少しで終わってしまう。この飴を舐め終わったとき、私は一

体どうなってしまうのだろう。大体の記憶が戻ってきた今、それを知るのが少し怖くなってきた。でも、ためらいはなかった。袋を開けて薄い黄色が混ざった飴を取り出した。辺りには私しかいない。涙をぬぐうと、飴を舐めた。これで私の記憶のパズルは完成するのだ。今、すべてを知りたい。口の中は今まで感じたことのない優しい甘さに包まれた。

『あなたの人生は希望に満ちているわ』  
そつと瞼を下ろした。

乾燥した暑さが、徐々に体力を奪っていく。こっちにきて十年近く経つのに、こっちの地域特有の夏の暑さにはどうも慣れない。

弾丸を取り除くと、出血がひどくなってきた。止血をしてもどんどん流れてくる。ガーゼで止血しても血は流れ続けた。止まってくれと思いつながら止血を続けると、しばらくしてから徐々に止まり始めた。少し安堵したのもつかの間、まだまだ息をつく暇もなく、次の処置を続けた。

手術を終えて一度テントの外に出ると、暑さがどつと押し寄せてきた。気が休まることもなく、いつ容体が変わるか分からない患者も多い。この紛争が終わる日はいつくるのだろうか。

「お疲れ陽菜。今日は特に患者が多いな」

「大翔（ひろと）。まあ今街に出てる先生たちと交代するまでは私たちが頑張らないとね」

「そうだな。もうひと頑張りだ」

そう言っただけで伸びをする彼の姿は頼もしかった。

先生たちが帰ってきた後、私は大翔と一緒に爆撃の止んだ街へと向かった。

「陽菜、お前またあの子のところにいくのか」

「うん、そのつもりだけど」

「そっか。でも、無理すんなよ。いつもあの子のどこにいった後は悲しい顔して帰ってくるんだから。友達として心配なんだよ」

「大丈夫よ。少しずつ話してくれるようになってきているから。何としてでもあの子をキャンプ地まで連れていかなきゃ」

その街に一人の女の子がいた。両親を爆撃で亡くして、今は小さな粗末な家で一人で暮らしている。普段何を食べて暮らしているのかも分からない。何を聞いても口をきいてくれなかった。言葉が分からないのかとも思ったが、しばらくその子を訪ねるうちに少しずつ口をきいてくれるようになった。こんな地域にいれば、親を亡くした子供たちに出会う機会はたくさんあった。でも、今まで出会ってきた子たちとその子には決定的な違いがあった。それは、医師団のキャンプに入ることを異常に拒んでいたということだった。私はどうしてもその子を助けてあげたかった。今のあの子は昔の私にそっくりだった。でも私は真央がいたから孤独にならずにすんだ。

今度は私があの子を支えられるようになりたい。そう思いながら私たちは街へと急いだ。

街は思っていた以上にひどい状態だった。けが人の多さも異常だった。私たちはけがをした人たちの手当てで大忙しだった。幸い持っていた治療道具だけで手当てができたから、重症患者が出ずに済んだ。もう日が沈みかけていた。

「今日はほんと大変な一日だったなあ」

大翔は本当に疲れているようだった。私も今日はかなり疲れがたまった。でも、これから、もうひと仕事あるのだ。

「じゃあ今から私行ってくるね」

「あつ、ちよつと待て。今日は俺も行く」

「えっ」

「俺も会ってみたいんだ、その子に」

「大翔……」

「俺も医師団の一人だ。貧困で苦しんでる子をほっとくことなんてできないさ。いつも任せっきりなのは心苦しいしね」

「ありがとう」

私はたまに思うことがある。私は、どんな時だって孤独を感じたことがないということだ。今まで私はそれを当たり前前として生きてきた。でも、このシリアにきて、それがとてつもなく恵まれていたことだということに気が付いた。ここで生きる人達の多くは孤独を感じながら生きていくという現実が私の胸に強く刺さった。私が当たり前前と感ぜられるようになつ

て欲しい。それが今の私の願いなのだ。

ランプを片手に彼女の家を訪れた。いつもながら、石の壁がポロポロになっているのを見ると心苦しくなる。中をのぞくと例の女の子の姿が見えたが、暗くて何をしているのかは見えなかった。

「私が先に入るね」

大翔がうなずいたのを確認すると、びっくりさせないように優しく声をかけた。

「こんばんは。今日は遅くなってごめんね」

ランプで照らした部屋の中は相変わらず何もなかった。石の冷たさが伝わる部屋の隅にその子はいた。

「お腹空いたんじゃない？ パン持ってきたから、一緒に食べよう」

「……うん」

やせ細った体から発せられるその声は弱弱しかったが、はつきりと聞くことができた。

「今日はね、もう一人お兄さんがきてるの」

私がそう言うと、大翔が中に入ってきた。

「こんばんは」

女の子は少し驚いたように体を震わせたが、大翔の優しい笑顔に少しづつ心を開いていった。

一時間くらい三人で過ごしていると、彼女の顔に少しづつ笑みが見えてきた。

「パンおいしい？」

女の子は食べながら小さくうなずいた。

「あのね、あなたにずっと聞きたいことがあるんだけど、聞いてもいい？」

「……何？」

「あなたの名前、教えてくれないかな？」

「……ネ……」

「ん？」

「……ネポ」

「ネポちゃん。素敵なお名前ね」

そう言うと、女の子は小さく微笑んだ。

「ありがとう」

私と大翔は顔を見合わせた。二人とも笑顔になっていた。結局この日ネポちゃんはキャンプに行くことを拒み続けた。

いつか閉ざした心を開いてくれるようになる日まで私は何度も彼女のもとにいき続ける。ネポちゃんはきつと幸せになれる。いや、幸せにしてみせる。そう固く誓った。

今日はなぜか早く目が覚めた。妙な胸騒ぎがしたのだ。外は少し肌寒かった。見慣れている景色がどこか寂しさを帯びていた。すると、遠くから何か銃声のようなものが聞こえた。私の勘が外れていて欲しいと願った。

「今の音聞こえたか」

いつの間にか起きていた大翔が慌てた様子で外に出てきていた。

「まずいことになりそう。とにかく街にいこう」

私たちは急いで準備をして、音がした方向へと走った。

街の近くまでくると、私の勘が見事に当たっていた。街から火の手が上がっている。離れた所から見てもかなり大規模な火事だと分かる程だった。

「これはまずいな。急ぐぞ」

「うん……」

もう辺りの肌寒さは消えていた。

街の中に入ると、炎の熱さに思わず顔をしかめた。辺りが真っ赤に染まって行って、進んでいくのもやっとだった。途中出会う人達を避難させていると、火の手がさらに広がっていった。

「もう、誰もいないな。ネポちゃんももう逃げたんじゃないか」

「いや、もう少し奥まで行ってみよう」

もうここが街のどこなのか全然分からなかった。私たちは必死にあの石の壁を探した。すると、前に一人の女の子がうずくまっているのが見えた。

「あの人は俺が助ける。陽菜はネポちゃんを探せ」

「分かった。ネポちゃんは任せて」

そうして私たちは分かれた。誰一人として死なせはしない。私は必死に走り続けた。

「あつた！」

あの石の壁を見つけたのは、大翔と分かれてすぐだった。石の壁で本当に助かった。辺りは炎でいっぱいだったが中はまだ大丈夫なようだ。

「ネポちゃん！」

「先生、たすけて」

中に入ると、瓦礫の下敷きになっているネポちゃんがいた。

「ちよつと待ってて、今いくからね」

足場に転がっている大きな石をどかしながら、ネポちゃんの所へと急いだ。

「先生、あたしうごけない」

「大丈夫だよ。今助けるからね」

壁に使われていた石が崩れていたのだ。必死にどかしていったが、一つ一つが重すぎて一向に足が抜けない。

「痛っ」

その時石を持ち上げる拍子に手を切ってしまった。石が私の血で赤くなっていく。

「先生、あついよ」

火の手がすぐそこまで迫っていた。何とか石を持ち上げようとしても血で滑って持ち上げることができない。その時、隣の石の壁が崩れてきた。その石は私の頭を直撃して、その場に倒れこんでしまった。

「先生！」

これまで聞いたことのないネポちゃんの大きな声がくぐも

って聞こえる。もうだめかもしれない。そう思ったその時、石のゴロゴロと転がっていく音がかすかに聞こえてきた。

「陽菜、ネポちゃん、大丈夫か！」

「お、お兄ちゃん」

ゆっくり体を起こして泣きじゃくっているネポちゃんの視線の先を見ると、そこには大翔の姿があった。

「……大翔」

「陽菜、ここまでよくやった。あとは俺に任せる」

そう言うと、大翔は着々とネポちゃんの足に乗っていた石をどかしていき、遂にネポちゃんの足が抜けた。

「お兄ちゃんありがとう」

ネポちゃんは目を真っ赤にしながら必死にお礼を言っていた。大翔はよく頑張ったなど言ってネポちゃんを抱きかかえると、

「陽菜、立てるか？」

と言って手を差し伸べてきた。私は出せるだけの声を出してこう言った

「先にネポちゃんを連れて行って。今私が一緒に逃げても足手まといになる。立てるようになったらすぐ後を追うから」

「何言ってるんだ！ 今逃げないと助からないぞ」

「今逃げたら、私はきっと途中で倒れてしまう。それであなた達が逃げそびれたら元も子もないわ。早く行って」

「やだ、あたし先生といっしょがいい。……あたし先生といっしょにキャンプにいきたいの」

その言葉は私の胸に深く刺さった。

「そう言ってくれて嬉しいわ。約束する、私は絶対あなたを一人にしない。少しでも離れるだけだから、お兄ちゃんと一緒に逃げて」

「先生……」

もうこれ以上しゃべるのはきつかった。意識ももうろうとしていく。私は最後の力を振り絞った。

「……ネポちゃん、よく聞いて。あなたはいつか絶対幸せになれる。そのために私は何でもする。あなたの人生は希望に満ちているわ。だからこの辛い時をしつかり乗り切るのよ」

「……うん」

「大翔、いって」

「……分かった。すぐに助けに来るからな」

二人は炎の中へと消えていた。これで二人は助かって、ここにくるまでに助けた人たちもきちんと治療が受けられる。これ以上望むものはなかった。また石の壁が崩れてきて、今度は私が石の下敷きになった。体中傷だらけで、もはや痛みというものが何なのか忘れそうになっていた。私は信念を貫くことができず幸せだ。ゆつくりと微笑むと、まだかすかに残る石の冷たさを感じながら目を閉じた。

飴が導いてくれた答えは、私に真実を伝えた。私の最期は幸せなものだったのだから悔いはない。はずだった。

「本当は後悔しているんだろう」

「……今までどこにいたんですか」

「まあ、ここから少し離れた所かな」

「はっきりしないんですね」

「そう、はっきりしない場所なんだよ」

「というか、私が後悔してるってどういうことですか」

「そんなの、僕に聞くことじゃないだろう？」

本当に何もかもお見通しのようなのだ。そう、信じたくはなかったが、私は後悔しているのだ。信念を貫いたはずだったのに、どうして後悔しているんだろう。その理由は分かっていた。私は約束を果たさなければならぬのだ。

「私、これからどうなるんですか」

「そんなの僕が知っていることじゃないよ」

「えっ」

正直意表を突かれて頭が回らなかった。なんでこの人が何も知らないのだろう。

「そんなに混乱することでもないよ。別にここは天国でも地獄でもないんだ。だからこれからの君の運命は今まで通り君自身が決めればいい」

「じゃあ、生き返ることも可能だったことですか？」

「ていうか、君はまだ死んでないんだよ」

「どういうことですか」

「言っただろう、ここは天国でも地獄でもないって。だからもちろん、君がもっと生きたいって思ったら生きられるし、

死にたいって思ったらこのまま死ぬことだってできる。答えは君自身が出すんだ」

「私は……」

私は今生死の境をさまよっているということなのだろう。そして、この選択一つで私の人生は一八〇度変わる。私はゆっくり目を閉じて今まで出会ってきた人達のことを考えた。一人欠けても私の人生は成り立たなかつただろう。全部つながって私ができているのだ。私は、そんな大切な人たちに誇れる生き方をしたい。そして、その答えはもうとっくに出ていた。そっと目を開けると、真っ白な空間に一つの扉が現れていた。

「あの扉に向かつてまっすぐ進むんだ。あの扉の向こうに君の未来が待っている。それじゃあ、僕はもう消えるとするかな」

「もう、会うことはないんですか」

「ああ、君はしっかり現実を受け止めて、新しい一歩を踏み出そうとしている。そんな君に、もう僕は必要ないんだよ」

最初はできるだけ関わりたくないって思ってたけど、今は違う。この人に出会えてよかったと心から思っている。

「嬉しいお言葉ありがとう」

私は最後まで見透かされていた。そのふわっとした笑顔に。私は大きく深呼吸してまっすぐ扉を見つめながら歩き始めた。扉の前に着いた時私は反射的に後ろを振り返っていた。そこには微笑んでいる彼の姿があった。

「君の前途に幸あれ」

ウインクをしながらそう一言だけ告げると、すっと姿を消した。風のように現れて風のように去っていく様は、飴を舐めているときの感覚と同じだった。そして、再び前を向くとすっとドアノブに手をかけ、開けるとそこは、この空間の何倍もの明るさを放っていた。私はその光に包まれるように一歩二歩と前に歩み出したのだった。

相変わらずシリアの夏は暑い。時間が過ぎるのは早いもので、私ももう十七となり、あの火事から十年の月日が流れていた。

しばらく歩いていくと、少しずつ街の全容が見えてきた。あの日から一度もここを訪れたことはなかった。火事で街は全焼し、炎に包まれなかったものは何一つなかった。それは、あの人に関しても例外ではなかった。

街は更地になっていた。もうここは私の記憶の中にある街の姿とは全く重ならなかった。そんな街の景色を見つめながら私はそっと胸に手を当てた。

『こうしてまたここにくることができるなんてね』

いつものように私の左隣に陽菜先生が現れて、そう語りかけてくれた。触れられそうな距離にいるのに触れられないもどかしさはいつまでたっても消えるものではなかった。

「先生、どうして一緒にここにきたいって言ったんですか」

『ここは、私が死んだ場所である以前に、私とあなたが初めて出会った場所じゃない。だからこうして、あなたとまたここにきたいってずっと思ってたのよ』

「あの時先生が私を絶対一人にしないって約束してくれたこと、今でも覚えています」

『そうね。だから私はこうしてあなたの心の中に住むことを選んだ。私、約束果たせたかな』

「ええ、先生は約束を果たしてくれました。」

先生は本当にすごい人だ。約束を守るために死を選ぶなんて、先生にしかできないことだと思う。

「先生、一つ聞いてもいいですか」

『うん』

「なんでそんなに私を愛してくれるんですか」

すると先生は軽く微笑むと、

『私も、そんな愛をたくさん貰ってきたからよ』

と答えてポケットから飴を一つ取り出し、私の口に入れた。柔らかい甘さが私を包み込んでいく、そんな気がした。